

古事記・日本書紀に親しむ参加のみなさまへ

# 疫病退散！ 巣ごもり期間企画 古事記・日本書紀と お祈りのお話

其の4 令和3年3月3日付

新川神社 宮司 船木信孝 筆

おひさしぶりですがみなさん、お元気でしょうか！宮司の船木信孝です。本当は年明けにお送りしようと思っていたのですが、かの大雪で3月になってしまいました。偶然ですが今日はぞろ目のひな祭りですね。今月末で富山に初の感染者が出てからちょうど一年がたちます。今日現在で7日間連続新規感染者ゼロです。たまにお会いする参加者の方から「再開は何時ですか？」と聞かれますが、現状から言いますと、「古事記・日本書紀に親しむ」を再開させるにはまだまだ時期尚早だと判断致し、**今しばらくの再開延期とさせていただきますとおもいます。**ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

現時点での再開の目処は、

①ワクチンが県民に行き届いた時点での世情を見ての判断

②変異株の動向

に依ります。

今日現在の厚生労働省のホームページではワクチンの接種期間を「**接種を行う期間は、令和3年2月17日から令和4年2月末までの予定です。**」としています。

従いまして**早くても来年の3月以降の再開**かなと現時点では想定しております。今後も国や地方自治体、専門家の情報を参考に検討しながら**皆様の安全第一**を最優先して参りたいと思いますのでご理解いただきたく思います。

古事記・日本書紀は素読会ですのでマスク着用でも飛沫が発生することとは避けられません。黙読という方法もありますが、やはり音読しないと受け身になってしまいますので「体験」では無くなりますし、聞いているだけだと眠くなったりして素読会としての効果が半減します。

また、現在の参加者で古事記昼の部が43名！ということで今の参集殿の広さでは密集が避けられない現状があります。夜の部は27名ですが、なんとも微妙な人数です。

したがいまして中途半端にやるよりも皆様の安全第一で事を進めて参りたいと考えております。

あと1年間、じっと我慢ということになりますが、本年もこのような形で元気が出るようなお話をお届けすることにより皆さんと心の交流を取りたいと思いますのでよろしく願いいたします。

## 人は祈る存在

さて、今回は「祈ると自然免疫力があがる」ことをお伝え致しましたが、今回以降はもうすこし具体的に「**どうすれば自分らしくお祈りできるのか？**」というところまでお話ししてみたいと思います。

祈りはやはり実践と継続することが大事ですからね。

ですが、色々な作法や宗教、神様やら仏さまやら、何が良くて何が正しいのか？どうも頭ではわかっていても心が向かない、腑に落ちない、始

めてもなかなか続かないという方、意外に多いのでは無いかと思えます。私自身も自分なりの「祈りのスタイル」を模索しながら現在もバージョンアップを重ねながら実践しています。

古今東西、太古より人類すべての民族で真摯に祈りが捧げられてきました。それは目に見えないが、確かに存在する不思議な働き・サムシンググレート(何か偉大なる存在)に対する祈りで、数千年もの間に我々の遺伝子に書き込まれてきたものではないかといわれております。

日頃特別な信仰心が無くても、自分の置かれた状況を打開したいとき、人は無意識に手を合わせて何者かに救いを求める仕草をほぼ反射的にするものです。

## なぜ人は祈るのか？

ひとつは「祈らざるをえなかったから」、  
もう一つは「祈りに効果があったから」です。

富山県民にとっては誰もが手に汗握るシーンでしたので覚えていらっしゃる方も多いと思いますが 2014 年 1 月、富山第一高校サッカー部が全国大会決勝戦、土壇場で 1 点リードされていた星陵高校に対するペナルティキックで、成功すれば同点、外せば敗退の場面で、大塚監督の息子は今まさに運命をかけたペナルティキックを蹴る直前に、両膝をグラウンドに着けて祈る大塚監督の姿はまさに「祈らざるをえない心境」であったと思います。

祈りを捧げていますと心が落ち着きます。継続的に祈りの習慣が出来てきますと心が動揺しても、折れそうになってもしがみつけるような拠り所、中心軸のようなものが心の中にできて「ブレない生き方」が出来るとなると思います。私も平成 28 年の新川神社 400 年祭を通じて些少ではありますが祈りを通じて学ばさせて戴きました。

## 「ブレない生き方」とは？

どんな状況にあっても大いなる力・・・(神様、仏様、既に亡くなった先祖や知人、友人、生前に心を通わせた人の魂など)・・・に見守られている、ちゃんと助けられて、救われているのだということを実感的に感じる事が出来れば、人はどんなに安心して過ごせる事でしょうか。

京都での修業時代に「何があってもええねん、だいじょうぶや！生きてるだけで丸儲けやねんから！」と、関西の人は割と楽観的な方が多いような気がしましたが、こういう人達と一緒にいると本当に元気がわいてきます。会話が日常的にボケとツッコミですので「笑い」がありますし。関西出身の私の先輩で家族やご自身も色々な事故や災いに遭って大変な境遇なのですが、常に前向きに生きている姿を見ますとこの人は何をかんがえて生きているんじゃないかなあ～、すごいなあ～と思います。

多分、これは祈りの本質であり、「ブレない生き方」とは、何が起きても「自分は守られているんや～」と思える心の拠り所・中心軸を持つこと、育てることじゃないかと思います。

## 人は祈られる存在でもある

そして同時に人は人に祈られている存在でもあります。

生まれてから父母や祖父母を始めとする家族の祈りがあり、成長する過程にも、成人して社会に出てからもなお、職場の上司、同僚、友人、支援者からの祈りを受ける存在でもあります。

色んな場面で、それが生きている上でどれほどの力になってきたのか、我々は忘れてはいけないことであります。

## 祈りの共通項

祈りの実践例として一般的に家族の病氣平癒や会社経営の危機、人間関係の改善などありますが、奇跡を起こした祈りの実践を分析しますと4つの共通項があったそうです。[(社)倫理研究所 祈りについての一考察より]

其の1「誓いを立てること」

其の2「真心からの願い」

其の3「深い愛情に裏打ちされている」

其の4「感謝が祈りの中心にあること」

其の1の「誓い」とは、「将来、ある事を必ず成し遂げようと決心または約束すること」であり、神仏に「禁酒禁煙の誓いを立てる」など「何々を叶えて戴いたら何々を致します！」という「代償」を伴う約束をすることです。

何かを実現するときに実現したい事柄を祈るだけでは無く、その代償として実践する事を宣言する、交換する、「**身代わり**」になる、という事も含まれます。身近な例で言いますと神社への「お供え物」「初穂料」がこれにあたります。

つまり、「祈る」時には具体的な実践の「誓い」と「代償」があると「実現しやすい」という事だと思えます。それだけ祈りに「本気」を籠めて実践する事を明確に宣言するという事ですね。

「祈る時すでに成就したものと思え」との言葉はこのことですね。

古事記・日本書紀では「身代わり」に関するエピソードとしてヤマトタケルの妻・オトタチバナヒメの入水により荒れる海路を静めた物語があります。

その一説の口語訳をご紹介します。古事記素読本では 198 頁の 7 行目から 200 頁 4 行目迄です。

#### 〈倭建命(ヤマトタケルノミコト)の東国征討〉

それからヤマトタケルはさらに東を目指して進んで行きました。走水海(はしりみずのうみ＝現在の神奈川県三浦半島と千葉県房総半島との間の水道)を渡ろうとしたところ、その海の神が波を起こしたため、船はくるくると回転してしまい、一向に前に進むことが出来ませんでした。すると、この船と一緒に乗っていたヤマトタケルの妻の一人のオトタチバナヒメが立ち上がっていました。

「わたしが、この乱暴な海の神を鎮めるために、あなたのかわりに海に入りましょう。あなたは、天皇から命じられた任務を立派に果たして、ご報告申し上げなければなりません。」

そうして、オトタチバナヒメは、海の波の上に菅(すげ)で作ったござを八枚、皮で作ったござを八枚、絹で作ったござを八枚敷いて、その上にお降りになって、次のような歌をお詠みになりました。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中(ほなか)に立ちて 問ひし  
君はも

かの相模国の野原で(火攻め攻撃の)燃えさかる火の中をものともせず  
に立ち上がって、わたしの名を呼び、(探し守ってくれた)あなたでした  
ね。

そして、オトタチバナヒメは、海に身を投げたのでした。すると、荒波は  
おさまり静かになって、船は無事に海を渡ることができました。

それから七日後、海岸にオトタチバナヒメが身につけていた櫛(くし)が  
流れ着きました。ヤマトタケルの目から、愛する妻を失った悲しみの涙  
があふれ出しました。そこで、オトタチバナヒメのお墓を作り、その中に  
櫛を納められました。

ヤマトタケルは、さらに東へ行って、乱暴なエミシたちをことごとく倒し、  
山や川の悪い神々もすべて従えました。そして、西へ引き返す途中の  
足柄(神奈川県足柄町)の坂の麓(ふもと)で、乾飯(かれいい=乾れ  
飯。携帯の食糧)を食べていたところ、その坂の神が白い鹿に変身して  
下りて来て、ヤマトタケルの前に近づいてきました。ヤマトタケルは、鹿  
が近づくのを待って、すばやく食べ残したネギ(ノビル)を投げつけると、  
それが目にあたって、鹿は死んでしまいました。そして、坂の上に登り、  
今来た東の方角を見て、三たび亡くなったオトタチバナヒメのことを思い  
出され、何度も嘆きながら、こう言いました。

「ああ、我が妻よ。」

だから、この東の国々のことを「あづま(吾妻)」というようになったので  
す。

是非、素読本の原文を読んでみてください。味わい深い物があります。

また、下記の上皇后美智子陛下の皇后御在位時の講演ですが、古事記・日本書紀を読む意義と、オトタチバナヒメノミコトの逸話を幼いときに読まれた時の心情を語られておりますのでこの機会にご一読ください。尚、この講演の全文が宮内庁ホームページに掲載されています。

## 第 26 回 IBBY ニューデリー大会(1998 年)基調講演

### 子供の本を通しての平和——子供時代の読書の思い出——美智子

(～前略～)教科書以外にほとんど読む本のなかったこの時代に、たまに父が東京から持ってきてくれる本は、どんなに嬉しかったか。冊数が少ないので、惜しみ惜しみ読みました。そのような中の 1 冊に、今、題を覚えていないのですが、子供のために書かれた日本の神話伝説の本がありました。日本の歴史の曙のようなこの時代を物語る神話や伝説は、どちらも 8 世紀に記された 2 冊の本、古事記と日本書紀に記されていますから、恐らくはそうした本から、子供向けに再話されたものだったのでしょう。

父がどのような気持ちからその本を選んだのか、寡黙な父から、その時も、その後もきいたことはありません。しかしこれは、今考えると、本当によい贈り物であったと思います。なぜなら、それから間もなく戦争が終わり、米軍の占領下に置かれた日本では、教育の方針が大巾に変わり、その後は歴史教育の中から、神話や伝説は全く削除されてしまったからです。

私は、自分が子供であったためか、民族の子供時代のようなこの太古の物語を、大変面白く読みました。今思うのですが、一国の神話や伝説

は、正確な史実ではないかもしれませんが、不思議とその民族を象徴します。これに民話の世界を加えると、それぞれの国や地域の人々が、どのような自然観や生死観を持っていたか、何を尊び、何を恐れたか、どのような想像力を持っていたか等が、うっすらとですが感じられます。

父がくれた神話伝説の本は、私に、個々の家族以外にも、民族の共通の祖先があることを教えたという意味で、私に一つの根っこのようなものを与えてくれました。本というものは、時に子供に安定の根を与え、時にどこにでも飛んでいける翼を与えてくれるもののようです。もっとも、この時の根っこは、かすかに自分の帰属を知ったという程のもので、それ以後、これが自己確立という大きな根に少しずつ育っていく上の、ほんの第一段階に過ぎないものではあったのですが。

又、これはずっと後になって認識したことなのですが、この本は、日本の物語の原型ともいえるべきものを私に示してくれました。やがてはその広大な裾野に、児童文学が生まれる力強い原型です。そしてこの原型との子供時代の出会いは、その後私が異国を知ろうとする時に、何よりもまず、その国の物語を知りたいと思うきっかけを作ってくれました。私にとり、フィンランドは第一にカレワラの国であり、アイルランドはオシーンやリヤの子供達の国、インドはラマヤナやジャータカの国、メキシコはポル・ブフの国です。これだけがその国の全てでないことは勿論ですが、他国に親しみをもつ上で、これは大層楽しい入口ではないかと思っています。(～中略～)

父のくれた古代の物語の中で、一つ忘れられない話がありました。年代の確定出来ない、6世紀以前の一人の皇子の物語です。倭建御子(やまとたけるのみこ)と呼ばれるこの皇子は、父天皇の命を受け、遠隔の反乱の地に赴いては、これを平定して凱旋するのですが、あたかもそ

の皇子の力を恐れているかのように、天皇は新たな任務を命じ、皇子に平穏な休息を与えません。悲しい心を抱き、皇子は結局はこれが最後となる遠征に出かけます。途中、海が荒れ、皇子の船は航路を閉ざされます。この時、付き添っていた后、弟橘比売命(おとたちばなひめのみこと)は、自分が海に入り海神のいかりを鎮めるので、皇子はその使命を遂行し覆奏してほしい、と云い入水し、皇子の船を目的地に向かわせます。この時、弟橘は、美しい別れの歌を歌います。

さねさし相武(さがむ)の小野(をの)に燃ゆる火の火中(ほなか)に立ち  
て問ひし君はも

このしばらく前、建(たける)と弟橘(おとたちばな)とは、広い枯れ野を  
通っていた時に、敵の謀(はかりごと)に会って草に火を放たれ、燃える  
火に追われて逃げまどい、九死に一生を得たのでした。弟橘の歌は、  
「あの時、燃えさかる火の中で、私の安否を気遣って下さった君よ」とい  
う、危急の折に皇子の示した、優しい庇護の気遣いに対する感謝の気  
持を歌ったものです。

悲しい「いけにえ」の物語は、それまでも幾つかは知っていました。しか  
し、この物語の犠牲は、少し違っていました。弟橘の言動には、何と表  
現したらよいか、建と任務を分かち合うような、どこか意志的なものが感  
じられ、弟橘の歌は——私は今、それが子供向けに現代語に直されて  
いたのか、原文のまま解説が付されていたのか思い出すことが出来な  
いのですが——あまりにも美しいものに思われました。「いけにえ」とい  
う酷(むご)い運命を、進んで自らに受け入れながら、恐らくはこれまで  
の人生で、最も愛と感謝に満たされた瞬間の思い出を歌っていること  
に、感銘という以上に、強い衝撃を受けました。はっきりとした言葉にな  
らないまでも、愛と犠牲という二つのものが、私の中で最も近いものとし

て、むしろ一つのものとして感じられた、不思議な経験であったと思います。

この物語は、その美しさの故に私を深くひきつけましたが、同時に、説明のつかない不安感で威圧するものでもありました。



古代ではない現代に、海を静めるためや、洪水を防ぐために、一人の人間の生命が求められるとは、まず考えられないことです。ですから、人身御供(ひとみごくう)というそのことを、私が恐れるはずはありません。しかし、弟橘の物語には、何かもっと現代にも通じる象徴性があるように感じられ、そのことが私を息苦しくさせていました。今思うと、それは愛というものが、時として過酷な形をとるものなのかも知れないという、やはり先に述べた愛と犠牲の不可分性への、恐れであり、畏怖(いふ)であったように思います。まだ、子供であったため、その頃は、全て

をぼんやりと感じただけなのですが、こうしたよく分からない息苦しさが、物語の中の水に沈むというイメージと共に押し寄せて来て、しばらくの間、私はこの物語にずい分悩まされたのを覚えています。(～以下略～)

+++++

如何でしょうか？これ以上の古事記・日本書紀の解説は私、未だ読んでいたことがございませんので参加者の方にはいつもお伝えしております。

さて、ここで前に申しあげました「祈りの4つの共通項」をこの物語に見てみましょう。

### 其の1「誓いを立てること」

「わたしが、この乱暴な海の神を鎮めるために、あなたのかわりに海に入りましょう。」

この部分ですね。成し遂げたい事と代償として「身代わり」を対で述べています

### 其の2「真心からの願い」

「あなたは、天皇から命じられた任務を立派に果たして、ご報告申し上げなければなりません。」

「真心」とは自分の為というよりさらに心の次元が一段高い無欲の自分といいたいでしょうか。主体が自我ではなく、さらに其の奥の心・無我であり、「公務」に対する心の発露ですのでこの部分からヤマトタケルと共に「任務を果たすための行為」であり祈りだと言うことが読み取れます。

### 其の3「深い愛情に裏打ちされている」

### 其の4「感謝が祈りの中心にあること」

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中(ほなか)に立ちて 問ひし 君はも

これはもう、私のへたな解説は無用ですね。この部分、特に歌はやはり原文に勝る表現はありませんので原文を上げさせて戴きました。

私は個人的に「君はも」の「も」の一字に愛と感謝が籠められていると感じております。

辞世の句として最後に火攻めの難の時にも身の安全を気遣ってくれたヤマトタケルに愛情と感謝をされた祈りが天地をも動かす、ということでしょう。



筑波大学名誉教授・村上和雄は 著書「人は何のために祈るのか」で

祈りの遺伝子をオンにしたかったら、まず他人のために祈ることからはじめたほうがいいかもしれません。こういう祈りをするとき、祈る側は自然に心の次元が高くなっていきます。本当の自分(真我)を開く祈りに入りやすいです。

本当の自分を開く祈りは、実現します。その結果は他人のためであってもけっしてそれに留まることなく、必ず自分にもよい結果として戻ってくるのです。なぜなら真我の祈りは常に「最適解(さいてきかい:考えられる可能な答えの中でもっともふさわしい答えのこと)」で、すべてに調和をもたらすからです。

と述べておられます。

「最適解」の捉え方ですが、一心に祈った結果がそうなら、それが一番いいと受け入れる事だそうです。一時は悪い結果に見えても、それが最善の結論だったということはよくあるものです。

大切なのはこの4つの「祈りの共通項」である「**真心からの誓いを立て、愛と感謝の心で祈り続ける**」ということでは無いかと思います。

祈りの基本は「いつでもどこでも」です。神棚や神社、仏壇の前だけでは無く、自然に息をするように祈っていくのが理想なんですよね。

さて、続きは次回に、もうすこし「祈り方」に関するお話をしたいと思いますので楽しみに！

